
世界に嫌われた女の子

chemical

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界に嫌われた女の子

【Zコード】

Z5255Z

【作者名】

chemical

【あらすじ】

ハルがふつとばされた世界で出会ったのは、神と皇帝。女嫌いの皇帝と人を信じきれない少女のはた迷惑な恋物語。（リハビリのために、サイトにあるお話を少しずつ改訂していくことにしました。タイトルは同じですが、少しずつ内容は変わっていくと思われます。全部改訂しなおしたら、サイトに戻します。土日以外1日1回更新したいです。）

1 (前書き)

不意に流血や痛いお話がありますので「注意ください」。
この改訂が終わったら、サイトを通常運転に戻したいです・・・

晴は不思議な子であつた。

晴自身は当り前の事だと感じていたのだが。

周りの人には分からぬものが、彼女には見え、聞こえ、触れられた。

けれど、晴はいつからか

自身に見えたこと、体験したことをあまり口に出してはいけないのだといふことも学んでいた。

それは、彼女の母親がいたからだ。

母親は精神的に弱っていた。

晴の言動一つ一つにひどく過敏に反応し、良いとは言えない反応を示す。

晴は子供の動物的な本能で感じ取っていた。

物心ついた時には彼女の母はすでにそういう精神状態であつたし時折、気まぐれのように示される愛情も

言葉の暴力を投げかけるときでさえも晴にとっては母という存在以外の何者でもなかつた。

母のその状態は彼女が生まれる少し前に他界した父親の事故のせいでもあつたかもしれないが、

彼女もまた敏い人であつたから晴の異常さに怯えていたのかもしれない。

母親は晴の不思議な言動を子供の言つことだから、と受け流すことをせず

罵りに変えて吐き出していつた。

まだ、言葉の暴力だけだけ、ましだと思うかもしれない。

晴自身は、幼すぎてそのころの生活を思い出すことも難しいが母と子、2人の生活の中で、大きな影響をもつ存在からの否定は

彼女を内向的にするには十分だった。

内向的になつた彼女を、支えてくれたのは母ではなく、人でもなかつた。

そうして、その交流を母に知られることでまた母の精神も削られていつた。

悪循環というのだろうか。

繰り返される言葉の暴力と堂々巡りに晴は黙つて耐えることしかできず、

彼女は母親の前であまり喋らず、行動しない子になつていつた。

だが、晴には逃げ場所ができた。

それは、彼女にとつてとても幸運なことであつたといえるだひつ。

子供というものには考え方、感じ方の見本が必要であり、一番の身近な手本が保護者だ。

それをなくしては精神の成育はうまく成り立たない。

晴にもそれは例外ではなく、事実その状態のままであれば彼女の今の状態はなかつただろうと容易に想像がつくというものだ。彼女が世間一般的に見ていい子に育つたのは彼女の母方の祖父母のおかげに他ならない。

彼らは、年に一度は顔を見せに来ていた孫と娘が訪ねてこないことに疑問を抱き

母親と晴を訪ねた時、彼らはその異常に敏く気が付いた。それだけではなく、彼らは彼女の母親が精神的に弱つてている状態にあるということや

母の晴への接し方を知つたときに素早い対応をしたのだ。もしかしたら、祖父母も薄々自分たちの娘の精神状態を疑つていたのかもしねない。

彼らは世間や周りの目を気にすることなく

母親を病院に無理矢理入院させ、晴を自分たちが住んでいる田舎へと引き取つたのだった。

祖父母に連れられて田舎へと行った晴は

その小さな目に、收まりきらない世界を見た。

怯えた小動物のようなビクつきは消え、青白かった頬には赤みがさし子供らしい柔軟性と順応性で欠けていた様々なものを取り戻したよ

うに見えた。

彼女の顔には表情が戻り、毎日近くの野山を駆け回ることを楽しみにする普通の子供になつていった。

彼女自身の周りには相変わらず、不思議な出来事が多かつたが田舎特有の空氣と、風土に紛れ込む程度のことだった。けれども、晴は不思議なことは祖父母の前でしか語らなくなつていつた。

幼かつたとはいへ、母親の怯えや嫌悪の表情からそういういた事柄を忌むべきことと認識していたからだろう。

他の人間には友人であつたとしても曖昧に誤魔化していたが一緒に生活を営んでいる祖父母にはさすがに通用しなかつた。初めのころは、祖父母に対しても怯えながら話していたが母親の代わりに彼女を愛しんでくれていた祖父母は、晴の話を聞いても母のよつな反応は一切見せず。

笑つて頷いてくれたり、ときには真剣な顔で注意を促したりした。祖父母は晴がほかの子と違うことに恐怖は覚えていないよつだつた。いや、本当は彼らも晴に恐怖を覚えていたかもしれませんず、

ただ、その感情を決して晴には悟らせないよつにしていたのかもしれない。

祖父母は、普通の子と同じよつにやつてはいけないこと、危ないと思われるよつなことは

晴に厳しく言い含めたし、他の子らと同じよつに叱りつけた。晴が不思議なことを体験した時は

幼い子供は神様の子だからね。と、優しく頭をなでてくれていた。それは一度壊されかけた晴の世界を壊さないものであり、とても居心地が良かつた。

そんな日々が続いていたのに。

晴の7歳の誕生日にひとつ悲劇が彼女を襲つた。

その場所に決していはざがない彼女の母親が、彼女の前に現われたのだ。

精神的に弱っている彼女の母親は祖父母の手配した病院に入院しているはずで、

その病院はここからとても離れているといふのに、

母親はそこにいた。

入院患者の着ているような服ではなく、以前見ていた普段の服装のままで

庭先に立つ彼女は、晴を見つけてゆっくりと微笑んだ。

そのとき祖父母は、晴の誕生日の御馳走のために1時間かけて隣の市の大きいスーパーに行くと車で出掛けた。

祖父母の帰りを楽しみに待つつ庭で遊んでいた晴の目の前に立つた母親。

その世間的にとても美しい部類に入るその顔は、別れた時となんら変わつていなかつた。

晴のものとは違ひ黒曜石のような髪と瞳をもつ彼女が、

静かにたたえた微笑みは、見る者に優しさを感じさせるには十分だつた。

「晴」

呼びかけられたその声に、晴は思わず母親に飛びついていた。

足がもつれるような勢いであつたが、母はしつかりと晴を抱きしめてくれた。

いくら傷つけられたとしても、いくら罵倒されようとも

彼女は晴の母親であり晴の大好きな人なのだ。

物心ついてから晴が知る母は、時折気まぐれに愛情のようなものを示す人だつたが

そんな偏つた情を与えてくれる彼女でも、母親という晴の狭い世界

の中心だった。

そんな彼女が、笑顔で腕を広げ
晴を包み込むように抱きしめてくれたことは

その時の晴には誕生日よりもうれしいことであった。

母親には1年ほどあつてはいなかつたが、

こんな微笑みで晴を呼ぶ彼女はもう、弱つていた精神が回復し
退院してきたのかと思わせるほどで。

「おかあさん！おかあさん！・・・」

泣きながらしがみついてくる我が子をやさしく抱きしめながら、
縁側から彼女は娘を家の中へと誘導する。

その顔には変わらず、微笑みを浮かべたままで。

「晴、ずいぶん大きくなつたのね・・・」

頭をなでながら優しく、泣きじゃくる娘に語りかける。

一瞬、声の中に暗いものが奔つたことに

泣いていた晴は気がつかなかつた。

けれど、それきり何も言わない母親に
晴は顔をあげ、母親を見上げた。

涙でかすんでいたが彼女の母親はさつきと同じ微笑みのまま。

そこで、晴は妙な違和感に取りつかれた。

こんな顔を母親は一度でも見せたことがあつただろうか。

時折見せてくれた愛情の中、こんなに手放しの微笑みはあつただろうか。

母親はいつも、少し怯えが見える顔で

それでも精一杯微笑んで晴を見つめてはいなかつたか。

張り付いたように動かない母親の顔を、晴は思わずじつと見つめて
しまつっていた。

変わらない。優しい笑顔。晴が見たことがないくらいの。

変わらない表情に、どこからだろうか

晴の中に恐怖がぽつりと広がつた。

晴は染みのよう広がる本能のままに、母親から後退る。

置で、晴の膝が少し痛いくらいに擦れてしまつたがそれを気にする余裕はなかつた。

母親は変わらない微笑みで彼女を見る。
「どうしたの・・・？」

微笑みは変わらない。

変わらない。
変わらない。

「やだつ！」

晴は怖くなつて逃げ出そうとした。何が、とかなんどとか、理由は分からなかつたけれどとにかく逃げることしか考えられなかつた。

恐怖に背を押されるように部屋を飛び出そうとして後ろを向いた彼女の首に細い、
ひものようなものがしゅるりと巻かれる。

それが何かを確認する間もないまま、ものすごい力で絞められた。

「な・・・」

疑問を声に出そうとしても首が絞められているために声にならない。

だが、苦しそうな晴をみながら母親は静かに言った。
彼女の首を絞める動作には何の躊躇もないまま力を込めて。

「大きくなるからよ。晴が、私のちいさな子のままでいいから。
」うやつて、もう一度晴は小さくなるの、小さくなつて

あのころに戻つてもう一度3人でやり直しましょうね

精神が病んでいるからか、晴にも理解できない。

言葉の意味を考える間もなく、晴の意識は闇に落ちた。

晴の中を駆け巡つたのは、母親に対する疑問や怒りではなく生きることへの欲求

ただ、死にたくなかつた。

次に目が覚めたとき、彼女は無機質な白が囲む部屋にいた。そこには祖父母が泣きながら彼女が目覚めるのを待つていて晴の名前をずっと呼びながら、よかつた、ごめんね、しなくてよかつた。

そう何度も何度もかけられる声と彼らの涙に彼女の記憶にあることが現実に起こったことなのだと実感させられ、それが悲しくて晴は思い切り泣いた。

悲しいのは、母親にそこまで嫌われていた事実だつた。なんとなく、自分が生きているからには母親は死んだのだろう。と妙な確信が彼女のなかにはあつた。

受け入れたくない記憶を、無理やり認めさせめるかのような祖父母の泣き声に

晴は、その記憶から逃避することもできず

ただ、本当にあつたこととして刻みつけられたのだった。

大分大きくなつてからだつたが、祖父母に教えてもらつたことによ

ると、

母親は欄間にロープをかけて首をつっていたらしい。
そばには彼女の字で“晴をあたしから守つて”という走り書きのメモも見つかった。

晴は自分で首を絞められてずっと氣絶していた

と思っていたのだが、祖父母の話によると醜く変わった母親のそばでぼんやりと母親を見上げていたらしい。

祖父母が声をかけると、けいれんを起こして倒れ、そのままあの病院に担ぎ込まれたということだった。

医師が晴を診察して初めて、首にひもが巻かれ尋常でない圧力で絞められた事実が明らかになつたという。

いくつかの組織はひどく傷ついていたが運良く重要な器官や声帯に損傷は見られず

絞痕に比べると医師も首をかしげるほどの軽傷だったらしい。

その後も、なんだかんだと問題はあつたものの、晴は順調に成長していった。

ただ、なぜか人よりもとても成長が遅かった。

小学校6年生でも3年生ほどに見えたし、中学生になつても小学生と間違えられる容姿のままだった。

だが、そのことで彼女がいじめられたりすることはなかつた。

からかわれることはよくあつたが、彼女は事実を否定はしなかつたし逆に言い返すこともしていた。

ひとえに彼女が、小柄ながら運動神経が抜群によく

小学生のころから誰一人彼女に喧嘩で勝てる者がいなかつたということも

いじめられなかつた理由の一つだろう。

広くて狭い田舎では、晴の祖父母が有名なサークル出身といつこと

が知れ渡つていたため、

彼女の運動神経を誰も不思議には思わなかつた。

上級生も、彼女には一目置いていたし、何より頭の回転が速く運動が抜群という彼女自身が人に嫌われるような性格ではなかつたという所が大きいだろう。もしかしたら、知らず知らずのうちに頻繁に彼女の周りで起つる出来事によつて、

周りの人間たちの同情を得ていたのかも知れない。少なくとも晴はそう思つていた。

それなりに、晴は幸せな生活を送つていたが、14歳の時に彼女の祖父が突然他界した。

高齢であつたのもそうだが、不幸な事故だつた。

おじどり夫婦と評判高かつた祖母も、祖父の他界から体調を崩し、晴が15歳の時に亡くなつた。最後まで晴を気にかけてくれていた。早過ぎる、一人の死はとても悲しかつたが

周りの助けと、祖父母の遺してくれた

これから生活していくには困らないだけの遺産、

生命保険によるお金、更にはよく知る弁護士のおじさんが後見人になつてくれるという、

祖父母の温かい庇護は祖父母がいなくなつても晴を守つてくれていた。

そうして16歳になつた晴は祖父母の家で一人暮らししながら高校生生活を送つてゐる。

「いってきます」「

写真の中の祖父母にいつものように挨拶をして、彼女は学校に行くために家を出る。

なぜだろうか、彼女の親しい人たちとはたとえ生身の姿ではなくなつたとしても

彼女の前に姿を現すことがなかつた。

常ならざるモノたちを見、交流することができる晴の不思議も依然として幼いころのまま残つているというのに。

もしかしたら、姿を現すことで晴があちら側に飛び込むとでも考えているのかも知れない。

それもいいかもしれない、本当に時々考えてしまう。

庭の隅でさわさわとうごめくモノたちに恐怖を感じることもなく、逆に親近感さえわいてしまうのだから。

そんなことを考えながら、晴は門の脇に寄せていた自転車に鞄を放りこみ

田舎の一本道を自転車で駅まで向かつた。

その駅から4つはなれた駅の近くに晴の通う高校があるので。

途中、朝からだだつ広い畑で農作業中の近所のおばさんたちと会い、いつものように挨拶をすると

一人のおばさんが手に持つていた籠の中から黒いごぶし大の物を投げてきた。

晴がそれを軽く片手で受け止ると、おばちゃんは笑つた。

「晴ちゃん！ いまから学校かい？ おばちゃんの特製焼肉おにぎりだよ！ もつていきな！」

「危ない人には気をつけるんだよ！」

「知らない人についていつちやいけないよ……」

「ほら、ジュースも持つて行きなさい」

「ほら、ジュースも持つて行きなさい」
晴に次々とおばちゃんたちから物が投げられる。さすがにするめい
かは朝からちよつと重いけれど。

みんな、晴が幼いころからのご近所さん達で

晴の祖父母が亡くなつたときから、まるで親のように晴を怒り、心
配してくれている人たちだつた。

彼らは、晴に会うといつも食べ物をくれる。

金錢的には困つてはいないので、そういうた食べ物は晴にとつて
とても助かるものだつた。

晴は、料理があまり得意ではないからだ。

何しろじ田舎なのでコンビニも少ないし、
スーパーの惣菜も夕方の割引を狙つているご老人たちやおば様たち
にかかれば

晴が学校から帰つてきたこには微妙なモノしか残つていない。

「ほら、あんまりぼさつとしてると電車に遅れちやうよ……」

くれぐれも、暗い路地には入らないようにね

いつものようにお菓子やらジュースやらをもらつて、
高校生な自分にはちよつと過保護すぎる言葉をもらつてと、いつも
通りの朝だつた。

「ありがとうございます！」

そう言つて、もらつたもの達を鞄に急いで詰め込んだ。

腕の時計を見ると、少し急がなければならぬ時間になつてゐる。

おばさんたちに笑顔で手を振ると、自転車に飛び乗り

そのまま黙々と自転車をこぐ。

朝の少し冷えた風が心地よく、通り抜けて行つた。

数分自転車をこぎ続けていると、田畠が少なくなり段々と車通りが
多くなる。

駅前の繁華街が近づいてきたのだ。

繁華街といつても住民が買い物をする商店街と

全国チーンのファストフード店が一軒あるだけのもの。

けれども国道はそれなりに交通量が多く、ちらほらと小学生が近所の小学校に登校している姿も見える。

国道沿いに駅へと向かっていた晴は、視界の端に黄色い帽子がぴょこんと動くのを見た。

無意識に眼で追つてしまつた晴が次の瞬間に見たものは

目の前の国道に黄色い帽子を被つた男の子が飛び出すところだつた。

「あぶない！」

叫んだが、自転車に乗つたままの晴の声は少年まで届かなかつた。物を落つことしたらしく、少年は下しか見ていない。

けれど、少年が飛び出した道にはトラックが迫つていた。

大きな音を鳴らすトラックに、少年は逃げるのではなくびくりと体を硬直させた。

とつたに晴は自転車から飛び降りて、走つた。

「つ・・・・！」

間に合うかギリギリのところだ。

持前の運動神経で体勢を崩すことなく自転車から道路に着地し、男の子を抱き上げると同時に男の子を歩道側へと放りなげる。いつも通つてゐる道だから、勘でしかないが

確かに少年を投げた方向には「ミの山があつたはずだった。

なくても、トラックにぶつかるよりはましだろう。

だつて、少年を抱えたまま反対車線に出ても別の車にひかれてしまう。

そこまでは頭と手が回つたのだが、

少年を投げた後自分がどうなるかなんて考えてなかつた。

ブレー キ音、悲鳴、衝撃

奇妙な浮遊感。

晴が覚えているのはそこまでだつた。

死にたくないな。
そう、ずっと昔と回り廻りを思った。

思えば結構悲惨な人生だつたのかと思う。

美しい人生を

れかけ、

祖父母は早く亡くなり、その他周囲の人たちから心配されるほど
いろんな事件に巻き込まれてきた。

・・・どう考へても典型的とまではいかないが、悲惨な人生だ。

「あー、まあ本人が満足してるだけでいいかなあ
が、言ふ出で。自分は二つさりとて二二思つ二二

「あ、死後の世界だから自分のどうともなるのかな？」

首をかじり、実際生きているのなら止めてくれはあたつたからには少なくとも骨折や、怪我をしてはいるはずで、その痛みがあるはずだ。けれども今、自分の体には全く痛みも傷もない。と、ここまで考えて気がついた。

ほのかに白く明るい夢の中のような場所。
ここが死んだ人が来る場所なんだろうか?
てっきり、すぐに幽霊にでもなるかと思つていたのだが、
意外に、未練とかがなかつたのだろうか。

聞こえてきた声が、空間を切り裂いたように晴の耳に届いた。

「ど

傷の具合はどう?

とにかくほほ笑みながら、声と同じくらいきなりその人は現れた。
真っ黒な瞳と豊かにうねる髪を背中に流し、
白い布で挑戦的な体の覆い方をしている。ないすばでーのお姉さん
だ。

ちなみに背中には真っ白な翼があつた。
天使のような恰好のその人を見あげて
晴は、言葉を失つた。

いきなりファンタジーな恰好をした天使っぽい人が現れたからでは
ない、
その人が、日本でこんな恰好をしていたら捕まりそうだなと思つた
からでもない
いきなり現れたその人の顔に、だ。

黒曜石のようにまつ黒な瞳と髪の毛

大きな目と少し厚めの唇。とても整つたその顔は

母親のものだつた。

「あ・・・お・・・かあさ・・・?」

目の前の者は母親に瓜二つであった。
混乱する。

自分の頭がおかしくなつたんじゃなかろうか。

ふいに、過去の網膜に焼きつけられた映像が、頭の中を掠める。
だってお母さんは・・・ゆれていなかつただろうか・・?

忌まわしい記憶の中の映像に心臓と体の言うことが聞かなくなる。
耳元で、うるさいくらい心臓の音が聞こえた。

かは、と肺から小さく空気が漏れる。

息ができない。

息を吸おうとしているはずの肺が、筋肉が働きを止めたかのようだ。まるで昔の無声映画のよひに、目の前で切り替わる映像のことしか考えられない。

「ストップ。落ち着きなさい！ ハル」

突然の女の人の声に、どうしてか晴の思考がはつきりとクリアになつた。

無声映画のような映像は瞬く間に視界から消え、緊張していた体が自由になる。

胸を押さえていた手も、制服も汗で湿っていた。

片手を床につけ、必死で酸素を肺に入れるため息を吸い込む。息を整えながら、ここまで動搖してしまったものなのか、と頭の冷静な部分で考えた。

まだ、囚われている。

母親に。

息を整える晴の前に、母親と瓜二つの女性は膝をつく。気配に、晴が顔をあげると

女性は晴の肩にそつと、まるで愛しむように手を触れた。

「正確にいえば、あたしはあなたの母親ではないわ。

母親のような存在ではあるし、そつくりなのも認めるけれど。

落ち着きなさい。あなたは死んでないわ」

もう一度、言い聞かすよつにゆつくつと言われた言葉は案外すとんと晴の心の中に落ちてきた。

「あなたは・・・だれですか？」「は・・・・？」

絞り出すよつに言つた言葉は、震えているけれどきちんと声にすることができた。

何のひねりも芸もない言葉だが、一番知りたいのだからしょうがない。

晴の中に冷静さはいくらか戻つてきただよつだつた。

女のは笑つて晴と同じようにその場に座り込み晴の目をのぞきこんできた。

とても怖かつたが

さつきの自分に負けたくなかったから、晴は無理やり目を合わせ続ける。

そこにはあつたのは意志のはつきりとした黒い瞳。強い生命力にあふれた瞳だつた。

そう、あの人はこんな目をしなかつた。
あの人の目はいつも違うところを見ていて、覗くとどこか暗い処に引き込まれそうになる。

そんな瞳をしていた。

この人と、彼女は違うモノだと

感覚で理解すると、晴の中に落ち着きと冷静さが一気にすべて戻つてきた。

女の人の目がやさしくなる。

そこには彼女には無かつた、晴への純粹な愛情があつた。
祖父母の笑顔を思い出すような、そんな視線だつた。
見ず知らずの彼女から、そんな感情を向けられることに少し混乱しつつ

晴は彼女が口を開くのを待つた。

「ハル。ここはね、あなたがいた世界と違う神々が治める世界。あたしはその中の一人。リルヴァーナ。あなたは元の世界では事故にあって、いなくなつたことになつてゐる」

言われてゐることとは無茶苦茶なのに、どうしてか真実だとわかつてしまつ。

真実だと理解してしまつことがおかしいのかもしれないが、晴は、この人の言葉に嘘はないと信じてしまつてゐる。

この人には、そうせざるを得ない圧力がある。

世界が違うとか、普通に考えてもおかしいことだ。

いくら、普通の人には見えないモノたちを見てきたとはいえ

晴は疑り深いほうだ。

神はまだいい。日本にはそれこそ多くの神々がいて私もその存在を幼いころから疑つてはいない。

神と呼んでもいいのかわからないものたちも多くいるが神と呼ばれる存在はどことなくキラキラとしているのだ。

この女人、リルヴァーナもそう。

時折目を細めてしまうほど、眩しい。

昔からの不思議現象のせいでこういう事態に慣れてしまつたのか。どちらにしても一応は納得するしかないだろう。

今の晴が疑いを持つても、あまり意味がない。

万が一夢の中だとしても、だれにも迷惑をかけていないのでセーフだ。

「私は、元の世界に戻りたいです」

戻れないとさつき聞いたような気がするが、聞いてみなくちゃ分からぬだらう。

ここが夢である「うどん」だらうと、私が生まれた所はあそこなのだ

から。

私の言葉に、リルヴァーナは少し厳しい顔をしていった。

「あちらの世界の神々はあなたを手放すことに決めたわ。もう、戻
れないの」

「ごめんね、と

いつの間にか握っていた手を強くつかまれて泣きそうな顔で言わ
れては、

根っこが馬鹿なくらいお人好しだといわれる晴に勝ち目はなかつた。
リルヴァーナが言った、晴を手放すとはどういうことなのだろうか。

「つまり、あっちの神様・・？ 仏様とかキリストとかに私が嫌わ
れたということですか？」

推測を言葉に出してみて、首をひねる。

神様に嫌われるって・・・なんか悪いことをしただらうか？

そんなに悪いことをした覚えはないはずなんだけど・・・

と、難しい表情で考える晴にリルヴァーナは焦つていつた。

「嫌われたんじゃないの！ むしろ好かれたからこっちにいるのよ！
あのね・・・あっちの世界とあなたの相性はものすごく悪かったの。
神々は何とか助けようとあなたを一度こっちに飛ばして相性の修正
を図つたんだけど・・・

結果は・・・運の悪さからもわかるとおり、ね。

だから、お気に入りのあなたを死なせたくないから、
相性のいいこっちの世界に泣く泣く手放すことに決めたのよ

必死な言葉から嘘はないと感じられて、それはそれで悲しくなった。

神様に言われるくらい

やつぱり、私ものすゞぐ運が悪かつたんだ…。

そんな気はしていたが改めて言われるととても悲しくなつてくる。
確かに、神様に嫌われているような気はしなかつた。
助けようしてくれるまで好かれていたのも知らなかつたのだが。
けれども、神様に助けてもらつていたというのにあんな運の悪さだ
つたのならば

確かに世界と相性が悪いというしかないだろう。
生きているだけましといつものだ。

トラックに吹つ飛ばされて、いきなり変なところにきて
神様に会つて、世界と相性が悪かつた…つてどれだけ現実離れ
しているんだろうか。

今の状況が夢でも一向に構わないし、むしろそのほうが嬉しいのだが
こつそりとつねつた頬は痛いし、脳味噌以外の感覚が現実だと示し
ている。

戻れないと言つていた。

元の世界に戻れないとなると、もう、友人にも近所の人たちにも会
えなくなるということだ。

脳が考えるのを拒否しているのか

ふわふわとした現実感のない、悲しさがどんどん膨らんできて、勝
手に涙まで出てきた。

「つ・・・」

目の前がゆがむ。

頬を、温かいものが流れしていく。

泣き始めた晴をリルヴァーナは優しく抱きしめて頭をなでてくれた。リルヴァーナのその手があるで、お母さんのように遠い遠い、昔の記憶が少し開いたのかもしない。悲しみだけではなく、既視感に後押しされて涙はどんどん流れていった。

泣き続ける晴にリルヴァーナは何も言わずにずっと頭をなで続けてくれる。

どれくらい泣いていたのかわからない。これから自分がどうなつてしまつのか、どうやって生きていけばいいのか

全くわからないまま、晴はリルヴァーナの腕の中で泣きつかれて眠ってしまった。

5 (前書き)

皇帝視点です。

政務も終わって、汗も流して寝るときになつて、問題とこうものはやつてくるらしー。

自身の寝室に入つてすぐに違和感に気がつき

帝国の若き皇帝サングルド・ジャヴ・フリードリヒは冷静に腰の剣に手をかけた。

そのまま、何やら膨らんでいる自分のベジツの掛布をめぐると、そこには少女が眠っていた。

で寝ている。

警備の厳しい皇帝の私室と、ある理由から

夜這いをしにきた貴族のバカ女かと思つていただけにこの状態は予想がつかなかつた。

幼女趣味にでもなつたのだろうか。

もちろん自分はホモでも幼女趣味でもないが、女性といつものに興味ではなく嫌悪を覚える、

遠ざけたのだ。
こう一種のトラウマのようなものがあるために涙を流して女性を

友人の一人にそういうた趣味を持つ者がいたためにたくらみは成功し、

近頃ほとんど女が近寄つてくることなどなくなつていったのに、どうしてこんな状態になつてゐるのであらうか。

「おい」

とつあえず声をかけてみると頬に泣いていた跡がある。
よくよく見てみると頬に泣いていた跡がある。

何なのだろうか。

この恰好を見るからには、ほかの国の者と考えるのが妥当だらう。
だが、記憶を探つてみてもこんな恰好をする国などない。

さらり、色素は薄いが黒茶の髪の毛とは珍しい。

黒に近い色の髪の毛はサングルードでは生まれにくい。

この国で信仰されている神の持つ色だからだ。

一瞬、似たような色が頭の中を過つたがすぐに眠たさに襲われる。
頭を軽く振つて、寝ている少女へと近づいた。

ここまで近づいても全く起きる気配がない。

ジャヴはどうしたものかと、ため息をついて寝台に腰を下ろした。
そうして、無造作に少女の髪の毛に手を伸ばす

色が珍しかったからかもしれない。

髪の毛を触つてみるとシーツの上に広がつて いる通り癖がなかつた。
さらり、と手から滑り落ちる。

ふと、今更であつたがここでいつも感じた嫌悪感がまつたくないこ
とに気がつく。

女ならば少女でも老女でも関係なく感じていた嫌悪感が今は
ない。不思議な感覚に驚きながら、皇帝は少女の肩を揺らした。

「おー

少し強くゆすると少女がうつすらと目を開けた。髪の毛と同じ黒茶
の瞳が見える。

だが、焦点はあつていない、寝ぼけているのだらう
ゆつくりと皇帝を見上げると、笑顔を見せた。

「リルヴァーナ……」

そのままじりとまた、ベットの上に転がってしまった。

女神の名前を呼んで寝こけた少女。殺氣もないし、安全そうだが、どうじるところのだろうか。

少し考えて、ジャヴはこいつの結論に達した。
まあ、寝る場所は十分にあるか

そう抑え、皇帝は少女の隣に寝転んだ。

朝、目が覚めると誰かの腕の中にいた。

リルヴァーナだと思い込んでそのまま胸に顔を当てるよいつにしてすがりつくと、

おかしいことに気がつく
リルヴァーナの胸がない

昨日はあつたはずなのに、だ。

おかしい。これはおかしい。

意を決して晴が顔をあげると、深い紫色の瞳とぶつかつた。
あつちも驚いているのかちょっと眼が見開き気味だ。

光を反射する長い銀色の髪と紫色の瞳の、日本人ではない青年。顔はとても整っている。

なまじ整っているだけに、髪の色などとあいまつて少し冷たい印象がある。

マツチヨといえるほどがっしりはしていないけど

腕の筋肉がしつかりしているから何か武術でもしているのだろう。
と、青年の腕をぺたぺたと触りそこまで考えてから自分がちょっと混乱していることに気がついた。

知らない人の腕を触つて筋肉の確認をする乙女はあまりいないだろう。

というか、知らない人に腕を触られて大人しくしているこの人も何か反応をしてほしい。

青年はそんな晴をただ見ていた。

あまり表情は変わらなかつたが、なんとなく怒つている雰囲気では

ない。

昨日のことであちよつと耐性がついたかなと思つたのだけれど、所詮人間は1回程度じゃ耐性は身につかないらしい。

自分の学習能力にも疑問を抱きかけて、気がついた。そもそもリルヴァーナの腕の中で眠つていたはずが、起きたらやらきれいな青年の腕の中。

混乱しないほうがおかしいかもしれない。

「お、おはよー」やこます？」

「おはよー」

外国人みたいなのに言葉が通じる。

それに、きちんと挨拶は返してくれた。

少なくとも直感から言って悪い人ではなさそうだ。

抱きしめられているのだが、他に何かされた様子もないし彼が落ち着いている様子から考えて、これが彼のベッドなのだと予想がつく。

やつぱり謝るべきだろうか。

晴が悪いわけではないのだけれども。

考え始めた晴の横で

青年はゆつくりと晴を抱きしめていた腕を外してベットから上半身を起こし

伸びをした。しなやかな動きは、大きな猫みたいだ、と思つ。やつぱり、彼の様子からして危険はなさそうなので、晴もあくびをして伸びをした。

ここは、どこなのだろう？

あのあと晴はリルヴァーナの腕の中で泣き疲れて寝てしまったのだと思つ。

と、いうことはリルヴァーナが連れてきたに間違いないが、何の説明もなしとはひどくないだろうか。

彼も吃驚していたようだが、まずは状況を知らなければ話にならない。

とりあえず、初めて会つた人への基本を実行してみた。

「あの、はじめまして、私は晴・ニ上と言います」

「ハル・ミカミ?」

「はい、晴がファーストネームで、三上がファミリーネームです」
外国っぽいからこいついう名前の紹介をしたがどうやらあつていたらしい。ちょっとほつとする。

「私はサングルド・ジャヴ・フリードリヒだ。どう呼んでも構わない」

そう言つて頭をなでられた。

言葉は冷たいが、いい人だと思つ。ただし、子供扱いされてる感が否めないが。

「ところで・・・」

質問をしようとした青年の言葉にかぶさるよつにして扉が乱暴に開かれた。

「ジャヴ!! いい朝だね! さあ重要なお知らせがあるんだ!」

この私の神官長としての今朝のお告げで女神が御子をこの国に預けるとでたんだ!

「黒茶の髪と瞳の女性だつてさ! 何年ぶりだと思つ?」

金色の長い髪を一つにくくつたその人は白を基調とした服を着ていた。

まるで、物語の中の王子様が着るような軍服とでもいえばわかりやすいだろうか。

その人自身も、まるで王子様みたいな顔立ちだ。

緑の瞳を輝かせて青年と晴のいるベットに目を向けた白い人は、そのまま固まつた。

綺麗な顔なのにあごが外れそうなくらい口が開いている。
思わず定規を当てて測つてみたいくらいだ。

「ジャヴ・・・？ その女の子は・・？ まさか・・・」

白い人が何か言つているが、小さな声すぎて晴には聞こえなかつた。
その代わりジャヴが晴に尋ねる。白い人の登場にも彼の表情はあまり変わらなかつた。

「ハル、おまえは何歳だ？」

「16歳です」

一呼吸おいて、

傍目に分かるくらいぎょっとされた。確かに今でも中学生に間違わ
れるが、その反応は傷つく。

「ジャヴは、何歳なんですか？」

お返しとばかりに、ちょっと気になつていた青年の年齢を尋ねると、
19歳だと言われた。

こつちもちょっと吃驚した。

彼の表情や落ち着きようから、もうちょっとといつてゐるかと思つて
いたのだ。

それがわかつたのだらう。ジャヴがちょっとムツとしたように言つ
た。

「お前が小さすぎるだけだ」
事実だが、何か釈然としない。

「今に大きくなりま

こんなやり取りを見ていた、さつきの話からするとシンカンチヨー
とかいづらじい青年は、

間の抜けた顔から、一気に怖い顔になつてベット近くまでずんずんと歩いてきた。

「ちょっとジャヴ。女には興味無いんじゃなかつたの？」
そうなのか、特殊な趣味をジャヴは持つていたんですね。

白い人の言葉に、晴は内心なるほど、と手を打つ。

だから、晴が危険を感じなかつたのだ。

白い青年の言葉にジャヴに視線を向けると、ジャヴはうなずいた。
「興味がないというか、嫌悪感があるな」

嫌悪感か、それは大変だな。と

そこまで考えてちょっとおかしいことに気がついた。

晴は女の子だ。世間一般的に見てどう考えたつて女の子だ。

じゃあ、ジャヴといつこの青年は晴にも嫌悪感を抱いていたのであらうか。

「すみません・・・」

いやな思いをさせちゃいましたか？と言外にこめた言葉をおくると、
ジャヴはちょっと困ったような顔をして首を振つた

「いや、なぜかお前は大丈夫だ。安心していい」

ジャヴのその言葉から

どうやら、この幼い外見ならば大丈夫らしい。

そう勝手に結論づけた晴は、この青年に嫌われなくてちよつと安心していた。

人から嫌われるのは、あまり好きではない。

だが金髪の青年の解釈は違つたらしい。

「ジャヴ！ なんてことだ！ ジャヴが、ジャヴが女に騙される日が来るだなんて〜！」

頭を抱えて叫びまくつている。

騙されてはいないと思うのだが、この状態であつたならば勘違いされてもおかしくない。

こんな風に叫ぶなんて、もしかしたらこのシンカンチヨーといつ青

年はジャヴの恋人なのかもしれない。

悪いことをしたな、と思ったが、どう説明すればいいのか全く分からぬ。

何しろこの世界に来てまだたった1日なのだ。

恋人（仮定）のはずのジャヴも白い人の誤解を解くでもなくベッドのすぐ脇で叫び続ける彼を見ているだけだ。

しばらくたつて、叫び疲れたのか
青年が静かになつてきのうを見計らつて、ジャヴが青年に話しかけた。

「おい、カイザーク。お前が何を思つてよひどいでもいいが、女神の御子とはこれのことじやないのか？」

さつき青年が言つたことをきちんと聞いていたらしにジャヴは、ハルを指さす。

ハルは指差されたあげくにこれ、と言われたが気になつたのはそこではなかつた。

「めがみのみ」・・?なんですか?それ

女神なら知つているがめがみのみとはビリュ漢字変換していいのか分からなかつた。

そんなハルを見た青年は、鼻で笑つ。

「ジャヴ、女性といつただろう。そんな10歳くらいの幼女を捕まえて女性とは・・・
目があかしくなつてしまつたのかい?」

「ちょっとまつてください!幼女はひどいです!私はー」

叫んだハルを手を上げて遮ると、青年は冷ややかな目を向けてきた。ジャヴに向けていた目と違つて、本氣で敵意がこもつてゐる。

「そうだね、皇帝の寝所に忍び込むなんて幼女ではなく、悪女の間違つたね

そう言つが早く、青年の手元が素早く動いてハルの喉元に剣があたられた。

「さあ、君はどこの手のものだい?何をしにこにに来た。

さつと吐かないとかわいい首が体から離れるよ」

そこにさつきまでの叫びつづけていた変な青年はいなかつた。

あまりにも素早く変わつた雰囲気、凍りつくような視線と殺氣が彼

を取り巻いている。

気を抜けば殺されるだろ？

隠されることがない殺氣と、あてられた剣から伝わる力が示していた。

さつきまでの会話の中で殺されるような話題の要素はあつただろ？

か。ハルの主觀だけだが、なかつたと思う。

じゃあ、寝室に入つただけで殺されるような人のところに来てしまつたのだろうか。

たぶん、それが正解だろう。

混乱していた時は目に入らなかつたが、剣を首にあてられた状態で動き出した脳は

視界に入るものがたちが高級なものとは縁がない自分でもわかるほどきれいに凝つたものばかりだと訴えていた。

ジャヴは偉い人であつたとしたら、そこに勝手に不法侵入したのは私だ。

殺されても仕方がないかもしれないが、あいにくと簡単に殺される気もない。

白い人の言つ言葉に全く心当たりがないのだから。

答えようもないし、いきなり剣を突き付ける人に話したくもない。

そう、のど元に剣を突き付けられた一瞬で冷静に考えた自分に苦笑する。

あいにくと、こんなことは初めてではなかつた。

平和な日本という国においてさえ、ハルの日常は妙に危険に満ちていたのだから。

周りの人間から同情を向けられ、あだ名がつくほどに。

様々な危険から身を守るために必死にいろんなことを学び、身につけて今日まで生きてきたのだ。

あまりに遭遇する事件や危険、昨日初めて知ったその理由は世界に嫌われていたから、

なんていうふざけたものだつたけれど

おかげで、16歳ながら世界の理不尽さはわかつてゐるつもりだ。

死にたくないなら足搔くしかない。

隙を探しながら、無表情に青年を見上げると青年も殺氣を向けてきたまま動かない。

冷静だつた。隙がまつたくない。

「動搖もしない。本当に可愛くないね。何も言つつもりがないのなら死」

「16歳だそうだ」

青年の言葉の途中でジャヴが何も感情のこもつていらない声で言った。ジャヴの言葉と、内容に一瞬青年の動きと注意がそれる。

その瞬間を、まつていた。

ハルは自分の喉にあてられていた剣に首が切れるのも構わずに、わざと首を押し付けて隙間を作る。

ハルが予想した通り、青年はジャヴの言葉に少し迷いが出たのだろう。

剣を引いてハルの首を飛ばすことをとつさにしなかつた。

それがハルの狙いだつた。

ハルの首は剣を押し付けたことによつて切れたが、切れただけだ。

首の傷には構わずにハルは小さくやわらかい体を利用して体をひねりあてられていた剣の軌道から抜けだした。

突然の反撃に応えようとした、青年の

剣を持っていた手が返される瞬間をねらつて青年の懷に飛び込む。剣は、一定以上離れた相手を攻撃するのに適している。

つまり近づきすぎた人間にとっさに攻撃しようとするならば手首を返すことが必要になるのだ。

ハルは、剣を持っていた青年の手首を捕まえると合氣道の応用でひねりあげた。

剣から手が離れそうになつたところで手首を捕まえていた手を放し落ちかけた剣を奪つて、青年に向けた。

全てはたつた数秒の出来事だった。

ここまでハルが素早く、的確に動けるなんて思つてもみなかつたのだろう。

なにしろ、青年の中で彼女は10歳くらいの少女といつことになつていたのだろうから。

ハルだって、いつも相手にしている包丁やナイフとは違う刃物相手で、

うまくいくかはわからなかつた。

けれど、このとき運はハルに味方した。

火事場の、というやつだろうか。いつもよりも素早く動けたし、青年の手をひねるのも簡単だつた気がする。

初めて扱う形の剣を支える持ち手が震えないように、両の手で剣を支えた。

逆転された青年が晴を睨む。

そうしてハルの顔の額のあたりに目を向けて、驚いたように縁の目を見開いた。

「おまえ・・

「10歳じゃありません。16歳です！失礼な人ですね！！」

青年が何か言いかけていたがとりあえず言いたかったことを囁く。首の傷がちょっと痛いので乱暴な言い方になってしまったかもしないが

いちばん言葉で訂正したかったのはそこだ。

喉を動かしたせいかさつきの傷からとろりと生暖かい血が流れるのがわかった。

気持ち悪い感触に思わず顔をしかめると、ふわりと傷に何かがあてられた。

見ると、ジャヴが寝間着の袖口を傷に押し当てていた。

首を絞めるでもなく、どうやら圧迫して止血しているらしかった。

「痛いか？」

そういうふた彼はなぜかハルのもつ剣を取り上げたりせず、なぜか、侵入者扱いをされたハルを心配してくれているようだった。

「少しだけ」

素直にそう言つとまた血が流れたようで寝巻の袖の赤がじんわりと広がつてゆく。

「喋るな。今医師を呼ぶ。カイザーク、呼んで来い」

ハルに剣を突き付けられている青年にやつ命令するとジャヴはハルの首に少し強く袖を押し当ててきた。

傷は意外に深かつたらしい。

血は苦手なほうではないが、何しろ起き抜けだ。

ハルは寝起きが悪い。ときどき寝惚けることもあるくらいだ。めまいがしてきたハルは剣を両手から外すとゆつくりとしゃがみこむ。

からん、と乾いた硬質な音をたてて剣が床に落ちる。床に膝をついてしまうとジャヴの手だろうか、寝台に寄りかかるように体の位置をずらしてくれた。どれほど経ったのか、

青年はいつの間にかいなくなつていて

ジャヴの命令どおり医師を呼んできてくれたらしい。

急激な失血によるめまいか、ただの寝起きのためか目を閉じて動けないでいたハルの首にジャヴではない第3者の手が添えられた。

「大丈夫ですよ。手をお放しになつてください。でなければ治療ができません」

ハルは手を床につけているのでハルにではなくジャヴへの言葉だろう。

優しげな老人の声が祖父とかぶつて聞こえた。

気が抜けて、涙が出てしまいそうになるのを必死でこらえる。

もづどれくらい祖父の言葉を聞いていないのだろう。

いつもはこんなことで泣いたりなんかしないのに。

信じたくないし、まだ完全には信じられないのだが世界から嫌われ、こちらに放り出されたということが精神的にきているのだろうか。

そんなことを考えていたら、ジャヴの手が首から外れていった。

手をついていた体を支えてくれる。

少し引き寄せられた形になつた。

力が出なかつたのでジャヴに寄りかかってしまう。

「ありがとう」

と、唇だけで言つと一言「いい」とだけ返つてきました。
なぜか、その一言ですごく安心する。

と、ここでわずかに残つていたハルの理性が自身に疑問を投げかけた。

ほぼ初対面の、しかも美青年に傷口押さえてもらい、
あまつさえ、支えてもらつて安心するのは何故なのだろうか？

答えを考える。

やっぱり美青年だからか。

でも、ふつうは緊張するだろう。やっぱり美青年だし。

ああ、でも男性愛主義者だつて言つてたしな。

でも、これが金髪の方の青年だつたら緊張とかの前に意地でも自力で立つっていたと思うのだ。

じゃあどうしてなのだろうか？

思考はとつとめがなく、痛みのせいか冷静に分析することができない。

考えれば考えるほど、よくわからない気持ちがハルの胸の中から出てくる。

まるで、無理矢理おいしいものを食べさせられたような、
釈然としない気持ちだ。

回らない頭で懸命に考えていたからか、顔にまで血が昇つてきたようを感じた。

そういうしてこるうちに、そつとハルの傷口に手が添えられる。
消毒するのだろうか？

出血が多くつたようだしもしかしたら縫うのかもしれないな、
と思っていたら

突然、首のあたりが一瞬確かに温かくなる。

そのままではさつときまでの感じていた傷の痛みと熱さが消えていた。

めまいは変わらなかつたが、いきなり体が楽になつたのだ。

眼を開き、ゆっくりと喉元に手をやると

血はついたが、肝心の傷はなかつた。

「あれ・・・傷・・・ない・・・？」

茫然と咳くと、そばにいた老人が顔をくしゃくしゃにして笑つた。着ているものは金髪の青年と同じものようだつたが、胸に金色の花の刺繡が入つている。

「お嬢ちゃん！ 治癒もしらんのかい？ いつたいどこの山奥で生活してたんだい？」

笑いながらハルの顔を覗き込んだ老人も、

先ほどの青年と同じようにハルの顔を見ると一瞬驚いたようになる。

「・・・・・ああ、額に御印があるねえ。お嬢ちゃんが女神の御子様かい・・・

わしは、神殿庁のグラン・ドルフといつ

それからハルの額をまるで孫にするよつて、しわくちゃの手でゆつくりとなつて。

懐かしくて、されるがままになつっていたのだが
グランはおもむろに立ち上がり、近くにいた青年を思いつきり殴り倒した。

「御子さまを傷つけるやつがあるか！ ここの馬鹿者！…」

本当に思いつきりだつたのだろう。

と、いうか老人の一撃にしてはいやに青年が吹つ飛んだ。

青年はものすごい音を立てながら壁に激突していつたし、今も動かない。

おやおや見ると、完全に白目をむいていた。

大丈夫だらうか？

グラントはなおも、倒れた青年近くと青年を蹴り始めた。

「御印も確認せんで！ ここの馬鹿が！ 一遍死んでその腐った脳みそ取り替えてこんかい！」

白目をむいた人間にやるようなことではなかつた。

一方的な暴力が続く。

ジャヴも、見ているはずなのに一向に止めようとしない。さすがに、かわいそうになつてきたハルはグラントに向かつて声をかけた。

「あ、あの・・・」

「なんだい？ お嬢ちゃん」

グラントは素敵な笑顔と共に振り向いた。

素敵過ぎて、かける言葉が見つからないくらいだ。

けれども・・・さすがに、

「さすがに・・・しんじやいませんか？」

そつ言つたハルの言葉でグラントは青年を蹴るのを止めた。ちょっと舌打ちしていたのが聞こえたが、気のせいとこいつにしておこう。

青年をけり終えて、ゆっくりとハルたちのまつに戻つてきたグラントは、

明らかにちょっとすつきりしたいい笑顔だつた。

グラントはジャヴの前に来ると深いお辞儀をした。

「陛下。では、わしはこれで。・・お嬢ちゃんはわしと来るかい？」

御子様は神殿庁の管轄だからね。これからいろいろなことを知らなきやいかんだろ？

祖父のような、グラントのしわくちゃの手が差し出されたが、ちょっと戸惑つてしまつ。

神殿庁とはどこかはわからないが、みことやらが行く場所らしい。きっとリル・ヴァーナが、ハルをみことやらにしたのだろう。けれど、神殿庁にそこで転がつてゐる青年みたいなのがたくさんいたらどうしようかと思つたのだ。

グラントみたいな人ばかりだといいのだが・・・

困つて、ハルは思わず、ジャヴを見上げてしまった。

不安がハルの顔に出ていたのだろう。

少し考えたような沈黙の後、ジャヴはハルの頭を撫でて言った。

「別にここにいていい。神殿庁から教育係を呼べばいいだろう」

無表情だったが、頭をなでる手は優しかった。

「ありがとうございます」

グラントの懐かしさとは違うことばゆさを感じながら、ハルはジャヴにお礼を言った。

小さく見えることも、時には役立つらしい。と考えながら。

このときグラントが、ジャヴの言葉とハルの頭を撫でる動作に目を見開いて絶句していたのをハルは見ていなかった。

この世界にふつ飛びされて3日目。
ハルはこの城の何がおかしいことに気がついた。
まあ、城といつてもまだジャヴの居住区域から出たことはないのだが。

とりあえず、ここに来て一番驚いたことは、

銀髪の美青年、ジャヴがこのサンクルド帝国と呼ばれる国の若き皇帝だったということだ。

19歳といつていたはずなのに、その若さで皇帝だという。
確かに、外国では若い国王がいるところもあると、聞いたことはあった。

ただ、若い国王がいたとしても政治的な面ではあまり活躍しているかどうか怪しいところだ。

けれど、ジャヴはある程度重要な案件では最終決定権を持っているし
一応総ての、帝国に関わる機関を動かすことができると言っていた。
上の地位に立つにはそれなりの実績が必要であり
年齢も経験の一つとして重要視するが、皇帝だけは例外なのだとう。

そんなこの世界の常識がハルにはいまいちピンとこない。
まあ、日本とほとんど環境が違うのですぐに納得できるものではないかもしない。

一つだけ、納得できたことといえば
カイザークと呼ばれた失礼な人があれだけ警戒心もあからさまにしたことだ。

王様の部屋に不審者がいたら、あんな対応にならないほうがおかしいだろう。

だからと言って、彼に対する印象が良くなつたのかと聞かれれば

ハルには否という方がなかつたのだけれど。

もうひとつ、ハルが驚いたのが敷地の広さだった。

ハルがいるのはジャヴの居住区域で、つまり皇帝の家のよつなものらしい。

館や塔というよりも、独立した一つの城に近いそこは皇帝一人のためにしてはとても広いのだ。

万里の長城みたいな堀の中は東京ドーム何個分だらうと考えてしまつたのは日本人の性だらうか。

だが、窓の外から眺める限りでも確實に5個以上は入ると思つ。建物だけでなく、庭もだだつ広いのだ。

でも、おかしいのはそこじやない。

この区域、というか、城に人が少なすぎるのだ。

ジャヴという皇帝が住んでいるところなのだから、もつと警備の人とか、メイドさんとかいてもいいはずだ。

けれども実際に3日間で見たり会つたりした人は10人ほど。

同じ人には何回も会うのだが、他の人は会わない。

最初はハルが警戒されているのかとも思つたりしたのだが、それにしてはこの城は静かすぎる。

人が動いている気配というか、ざわめきがちつとも聞こえてこないのだ。

つまり、ハルが警戒されていたり監視されているのではなくて、もともとこの区域には働いている人が少ないということなのだらう。そういえば、ジャヴも皇帝陛下という身分のはずなのに着替えなどは一人でしているらしい。

ハルはこの国の服をまだ一人では着られないの、ディアというぽっちゃりとしたおばさんに手伝つてもらつている。その人が、そう話してくれたのだ。

偉い人もきちんと身の回りのことを一人でするんだなと、感心した。

ディアはこの城で見る3人の女の人のうちの1人。

この城は人が少ないとさらに女の人はもっと少ない。

3人はみんなメイドのような服装をしているおばさんで、侍女というもののらしい。

1人はマリーという洗濯物を集めて洗っている人。

2人目はエリザベスという人で、いつもものすごい速さで掃除をしている人。

そして、3人目のディアは食事のときとか、服の手配とかそのほかいろんな細々したことをやっているらしい。

みんないい人たちだ。

ディアが主にこの世界に不慣れなハルの身の回りのことを世話してくれているのだが

カイザークとかいう、あの白い人のように

いきなりジャヴの寝所に現れたハルのことを怪しむでもなく、ものすごく好意的だった。

ディアだけではない、城の中で出会う人のほとんどがそうだった。ジャヴやグランからにか伝えてあつたのだろう。

彼らは好意的ではあつたのだが、

微妙に何か期待のこもつた目で見られているような気もした。グランもそういう目を時々する。

2日目から毎日、午前中に、ハルはこの世界のことなどを教えに来てくれるグランと勉強会をしているのだが、

ハルを気遣ってくれているのか

グランは空いた時間にはお菓子やお茶を持ってくれたり、声をかけにきてくれた。

彼の教え方はとても解りやすいし、この世界のことを知るのはそれなりに面白い。

ハルの知る常識からはかけ離れているものもあつたが

政治や、お金などの考え方によく似ていた。

今日も、さきほどまでグラント勉強会をしていたのだが、ディアが来て「だいぶ時間を過ぎますよー」と、授業を中断させたのだった。

根を詰め過ぎるのも良くない、とディアはハルとグラントがすっかり忘れていた食事を持ってきてくれたのだ。それなりに記憶力が良く、勉強熱心なハルにグラントもつい熱が入ってしまうらしく、

気がつけばいつも午後をだいぶ過ぎていた。

グラントはハルに、この世界の仕組みや成り立ちを丁寧に教えてくれた。

それはもちろんハルの常識とはかけ離れているからこそ、現実として理解するのは簡単ではないが、神話を聞いているようで面白い。

実際に神という存在を知つてしまつていてからこそ、切り替えも早かつたのかもしれない。

この世界の輪郭が見え始めてきていた。

この世界は6人の神様によつて作られたフォールという世界で、6人の神様にちなんだ6帝国があるといつ。

帝国のほかにも国はあるが、帝国と呼ばれるのは6つだけらしい。この国は光の神様リルヴァーナにちなんだ国でサングルド帝国といつ。

リルヴァーナの眷族である光竜を祖先に持つ皇帝が代々治める国で、他の帝国はそれぞれ闇の神様ガウルの闇竜の末裔ヒューバルド帝国、水の神様リインファの水竜の末裔ラヴェル帝国、

風の神様テューダの風竜の末裔シルフィ帝国、

土の神様キリエの土竜の末裔ムルグ帝国、

火の神様カカルヴの火竜の末裔スティーダ帝国がある。

6つの帝国はそれ、独立しながらも協力して大きな世界を治めているそうだ。

神々と竜によつて帝国ができたというグラントの話は、まるでおとぎ話のようだつた。

帝国以外の他の国は帝国に協立や属国を誓つた国だつたり、

完全に独立体制を貫いている国なんかもあるらしい。

そういうた国は小さいが多く、帝国には手を出さないが国同士の争いは頻繁に起こつてていると言つていた。

そういうた事への介入や、戦争の停止、他の帝国との連携、自國の政治などを、皇帝や帝国が行つてているといつ。

サングルド帝国での主な政治の仕組みは頂点に皇帝、その次に政庁、財庁、魔術庁、神殿庁、騎士庁があり、

またその下にいろんな機関があるといつものであつた。

政府には5人、他の各庁には3人の庁官長がいて、仕事と権力を分担して政治を行つてゐる。

政治に関しての重要な案件は各庁の庁官長と皇帝とで会議を行つて

決議するのだそうだ。

最終的な決定権は皇帝にあるが、決議も決して飾りではなく重きをおいているという。

また、法律もきちんと定められていてサングルド帝国法という分厚い本が5冊ほどあった。

これはグランが持ってきてハルに1冊見せてくれたのだが、何とか書いてある事の意味はわかるものの、

ハルには難しかった。

ハルは女神のおかげなのは分からぬが、便利なことにこの国の言葉だけではなく書いてある文章の意味もだいたい理解できることが分かった。

だが、文字は書けない。

そのため、グランとの勉強会のほかに小さい子用の教本で文字を覚えていいる。

ハルがディアの用意してくれた遅めの昼食を食べながら今日習つたことを整理していると、部屋のドアから軽めのノックの音が聞こえてきた。

皇帝視点です。

若き皇帝、サンクルード・ジャヴ・フリードリヒはいつもの執務室で3日前のことと思い出していた。

3日前に現れた少女。ハルのことである。

ジャヴは5年前の前皇帝の逝去の際にあつたある出来事で、女性といふものに嫌悪しか感じなくなつていた。

軽く殺意まで覚えるときもあり、相当なものである。

だからと云つて男に恋愛感情を抱いたことはもちろんないのだが、女性に触れられるだけで殺意がわくという今までの状態から自分は一生独身で過ごすことになるかも知れないと先日までは考えていた。

帝位は最悪、すでに貴族に降嫁した姉の子供でも養子にすればいいかと思つていたのだ。

血筋的には少し問題があるが、リルヴァーナの庇護が厚いこの帝国ならば

何とかやつていけるだろう。

そう、考えていた。

あの少女が現れるまでは。

あの少女、ハルは出会いからして不思議だった。
寝室にいきなり現れたのに、自身は彼女を切り殺すことなく放置してしまつた。

ジャヴの居住区域は極端に人の数を減らしてある。
あそこにはジャヴに幼いころから仕えている比較的嫌悪を感じないメイドと使用人や護衛のみ。
彼らが優秀なため、侵入できるものはよほど実力をもつた暗殺者くらいであろう。

一度、勘違いをした女官が来たこともあつた。

なかなかに優秀な者だったのだが、仕事を評価したことが勘違いを助長したらしい。

メイドたちも、仕事のことだと思い彼女を通したらしいがジャヴが彼女に女性としての魅力を感じたことはなかつた。執務室に来ていた馬鹿女たちのことを知らなかつたわけではないといつのに

私室まで来て、無事に帰れると過信していた彼女に待つていたのはジャヴの容赦のない攻撃だつた。

皇帝の私室に許可なしに、理由もなく侵入したとして不敬に問われたと聞く。

一応命は取り留めたと報告があつた気がするが、彼女のそれからに興味はなかつたのでその後どうなつたのかは知らない。

最初、ハルに気がついた時にも、実際殺そうと思つていたのだ。寝ぼけっていた時の自分の状態をはつきりとは思いだせないがただ、難攻不落だったこの場所に侵入してきたやつの顔を見てやうと思つたのかもしれない。

それが

あの時掛布をめくつた理由だつたと思つ。

だが、掛布をはいだところに居たのが少女だったのは驚いた。

しかも、変な格好でのんきに寝てている。

一瞬、馬鹿な貴族の差し金かと思ったが、

そこまで、ジャヴを理解していない貴族などもうほとどいないだろつ。

女嫌いのジャヴの居住区に死を覚悟させてまで娘を送り込むだろつか。

いくらなんでもそんなことはしないだろつ。

新手の暗殺者かとも思ったが、暗殺者が標的の部屋で寝こけるはずもない。

何より、殺氣もないし、寝たふりをしているのも感じられなかつた。うつすらと覚えていることは、声をかけて髪の毛を触つたということだ。

ジャヴは極限に眠い時寝ぼけた様な状態になつてしまつたが、女性に声をかけ、ましてや触るなんてことをするほどではない。ただ、あの少女に興味が湧いたのだと思つ。

触つてからしばらくして嫌悪感がないことに驚いた。それでなくとも、触つてから気がつくなんて頭がどうにかしていたんじやないかと思う。

その後、普通にベットで一緒に寝たのはたぶん衝撃が大きすぎて理性的な考えが停止していたのだろう。

いや、今でも停止しているのかもしれない。なにしろあの日から、ハルという少女については嫌悪なんてまったく感じていないのである。

むしろ、何か小動物のような感じが可愛らしいとも思つ自身がいる。起きて、自分がハルを抱き込んでいたことにも驚いたが、おかしいとは思わなかつた。

黒茶の瞳が女性に対する嫌悪感なんてすつとばしてしまつたかのようにも思える。

あれで16歳とは驚いたが、少女じゃないとわかつても何も変わらなかつた。

カイザーグが部屋に来た時の言葉で妙に納得したくらいだ。

これだけ嫌悪を感じないのは、普通の少女ではなく女神が選んだ御子だつたからか、と。

ジャヴの嫌悪感もさすがに神に対してはあまり向けられることがない。

カイザーグが少女に向かつて剣を構えたときにはわずかに憤りを覚えたような気がする。

ハルが16歳だという言葉をカイザーグに言つた時も

女性に援護するような言葉をかけた事実が

そんな自分が信じられなくて、思わず固まってしまっているだけ。少女の流血だ。

ハルのカイザークに対しての行動と度胸はものすごいかったと思つ。常人ではできないような無駄な動きがない逆転。

しかし、それを見ても彼女が暗殺者だなんて思わなかつた。いや、すでにそう思えなかつたのかもしない。

ハルの首から血が流れているのが目に入つたときには、自分の体の血が逆流したような感じがした。

首に袖を当てて圧迫しても、血が逆流したような感じは止まず。気がつけば、思わずカイザークに命令していたのだ。

カイザークも何か思うところがあつたのか、いつもならばもう少し疑り深くなるところを急いで部屋を出て行つた気がする。今思えば

神官たちや魔術師には、

御子に付けられた印を見分けられる技があると聞いたことがある。カイザークも何か感じていたのかもしれない。

あの時、カイザークが医師でもある神殿庁官長グランを呼んで、戻つてくるまでの間も妙な感覚は収まることがなかつた。そのため、目を閉じたままのハルに何も声をかけられないままグランが来てもジャヴはハルの首から手を離せなかつたのだ。グランの言葉にやつと放して、ハルの体を支えたのだがハルの目は開かず、顔色も蒼くなつていた。

思わず声をかけたら、ありがとうと唇の動きだけで返つてきてどうやら意識もはつきりしているらしいとわかつて妙に安心した。ハルにグランが治癒をかけるとハルの傷は癒え、ジャヴはその時にはじめて自分がハルを心配していいたということに気がついたのだった。

グランは、ハルを神殿庁に連れて行くと提案してくれたが多分、女嫌いのジャヴを気遣つてくれたのだろう。

だが、ハルがジャヴを不安そうに見つめている姿を見たら思わず

ここに居ればいいと言つてしまつていた。

そう言つた後の、安心したようなハルの笑顔が可愛らしかつたので思わず頭をなでてしまつたのだが、

その時のグラントの顔は見ものだった。

あの、グラントが目を見開いて絶句した様子など初めて見たような気がする。

その後のハルの世話を頼んだ使用人たちの顔も面白いことになつていた。

何しろ、女嫌いの皇帝が少女と一緒に住むといったのだから当然だろう。

少女といつてももう16歳だと言つていたが、完全に周りは子供扱いだつたようだ。

メイドたちは、女嫌いのジャヴが連れてきたのだからもう、嫁候補だお祝いだと騒いでいた。まあ、あそこにはメイドも3人しかいないのだが。

この様子で行くとハルを皇妃にするために何も言わずともいろいろ世話をしてくれそうだった。

幼女趣味だと噂が立ちそつだが、仕方がない。

独身でいようかと思つていたところに、

嫌悪感がまったくわかない少女が出てきたのだからこれぞまさに女神の思し召しというほかないだろう。ジャヴの顔に自然と笑みが浮かぶ。

出会つて3日目にして、ジャヴにはハルを逃がす気は全くなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5255z/>

世界に嫌われた女の子

2011年12月20日21時47分発行